

## 第 14 回（1/14） 家族機能の変容

### 1. 期末成績評価について（再掲）

シラバス

「平常点（受講取組みの積極性）（60 %）、期末レポート（40 %）により評価します。」

↓

【出席状況】（配点 30 %）。

＊ 注意：出欠についての考え方 ×出席してれば単位くる…

【授業参加の積極度】（配点 30 %）

BBS への投稿回数・内容、授業中の発言や質問、提出物の提出状況などにもとづいて、授業参加の積極度を総合的に評価します。

【期末レポート】（配点 40 %）

講義内容に関連するテーマを、各自の関心に即して自由に設定してもらいます（分量 3,000 字以上）。授業内外で吸収した知識をもとに、自らの思考を駆使して社会科学的に考え抜いた痕跡がどれだけ反映されているかの点を評価のポイントとします（たんなる感想文や、文献・Web からの引用の継ぎはぎでは低い評価となります）。

講義内容に関連するテーマを、各自の関心に即して自由に設定し、

- ・ 論者の主張の要点をまとめる（1,000 字程度）
- ・ それに対するあなた自身の考察・見解を述べる（2,000 字以上）

分量： 3,000 字以上（表紙不要、学籍番号と氏名を明記、ステープルで留めること）

提出期限： 定期試験日（1/30～2/05） 教場にて提出

（定期試験時間割発表時に、日時・教場を確認のこと）

「考察・見解」の評価基準：

論証（問い、主張、根拠…）がしっかりなされているか、問題を自らの思考によって（自分のあたまを使って）、論理的に分析した痕跡がどれだけ反映されているかの点を評価基準とします。

※ 事後提出は認めません（やむを得ない事情により試験日当日に出席できない場合は事前に連絡を！）

※ レポートが提出されない場合、レポート評点は 0 点となります

※ 学内内規により総得点が 59 点以下の場合、成績は「不可」となります

## 2. BBS 投稿から

「…退院許可が出て一人暮らしに不安だから退院したくない人がいても、次に待っている人もいるし、その人よりも大変な病気をかかえている人がいるかもしれない。なので、いさせてあげたいと感じても仕方ないのかもしれない。」

「必要とする全ての人がサービスを受ける為には、例外を認めてはいけないと思う。どんな事情であれ退院できるようになったら退院すべき。それでも居座り続けたいのならそれこそ有料にすべきだと思った…。」

「生活保護はどうやっても生活できない人だけが受けるべき。税金でまかなわれているのだから、よっぽどの理由がないと受けるべきではないので、しっかりと審査してから給付するべきだと思う。生活保護で得たお金を使ってパチンコをしたり、お菓子を購入したりはダメだと思う。そのお金は贅沢をするためにあるわけではないので、金額が安いからといって許される訳ではないと思う。『生き甲斐だから』という話もあったが、それが生活保護で許されてしまったら、その人は一生生活保護で暮らしていき、何も解決しなくなる。欲をかくなら、自分で何かしらの努力をするべき。」

「生活保護とは、高齢や病気、ケガなどで自活できない場合を除き、仕事が見つかるまでの緊急避難のセーフティネットなはずである。パチンコや競馬をできるくらいのお金があるなら、早く脱すべき状態という意識を持ち、みんなからの税金でまかなわれていることを忘れてはいけないと思う…。」

「正当な理由で生活保護を受けている人に対して娯楽を一切許さないというわけではないし、やりくりの中で浮いたお金を娯楽に使うのはかまわない。そう言ったらギャンブルも良いのかもしれないが、賭け事はそのお金がマイナスになってしまうこともあると考えるとやはり「ギャンブル」に使うのはなあ..とってしまう…。」

「どんなに小さな額でも、その人が生きるために必要でないものを生活保護費で買うべきではない。生活保護を受けていないが生活がギリギリの人もいる中で、税金を使って贅沢をすると、公平性が失われてしまうのではないかと思った。」

「私は、税金で馬券や好きな事をするのは個人の自由だと思う。確かに、記事を見た時は税金を娯楽に使用されるのは苛立ちを覚えるが、自分が将来同じ立場になれば、娯楽を失われるとストレスが溜まり、精神的に参ってしまう可能性もあるので、私は人の税金の使い方には何も口を出さない」

「パチンコも限られたお金で、自分の責任で楽しみで行うなら別にいいと思った。生活保護は働けなくてお金のない人が、必要最低限の生活を送るために必要最低限のお金を渡してるのだから、少ないお金を切り詰めて娯楽をするのなら本人の勝手だと思った。生活保護は悪いイメージがあるけど、全員が楽しんで生活したいがために受けてるわけじゃないし、それしか手がない人もいると思うから、負債を抱えないように、もし抱えたのなら全て自分の責任で返済せれば良いと思う…。」

「わたしは生活保護の中の娯楽に関して言えば、ギャンブルは許されないにしろレンタルやお菓子は認められるべきではと考えている。まずなぜギャンブルは良くないと思うかは特に依存性が高く、生活保護を受けている状態でギャンブルをしたいと思うのは依存症だと思うからだ。私たちはパンと水だけでは生きられず、娯楽がなければ精神面で病んでしまう。そうなれば社会復帰からはもっと遠のく。刑務所でも娯楽があるのに、法律を犯していない仕方なく生活保護を受けている人たちに対して一切の娯楽を認めないのは人道的ではない気がする。また、これは生活保護に限らないがいつ自分が当事者になるか分からず、弱者というのは必ず生まれる中で他人を許すことで長期的には自分を許すことに繋がるのではと感じた。」

「生活保護を受けている人が何に使っているか監視するにも何がダメで何がいいかと線引きも難しいと思うので、半世紀も変わっていない制度の内容を変更するべきなのかなと思った。生活保護を受けているなら娯楽は我慢すべきだと思うし、あくまでも生きていけるかギリギリな人のための特別な処置であるので、娯楽も安ければいいなどの問題ではないと感じた。」

「生活保護を受けている人が娯楽に使うのは良くはないと思うが、使ってはいけないと決めつけてしまうのもどうなのかと思った。最低限度があるから自分で考えながら使えばいいと感じた…。」

「健康で文化的な最低限度の生活を保障するために生活保護制度は存在するが、これから先不正受給の増加や現代の高齢化社会における医療・介護で国や国民の負担はさらに増えていくのなら制度を見直し、特に娯楽費の基準や金額、扱いは変えていく必要があると思った。また、生活保護はセーフティネットとあったが、そうであるなら就労支援などの援助を充実させ生活保護を脱するサポートをより増やしていくべきではないかと感じた。」

「生活保護費でギャンブルをすることは何故いけないのだろうか？私は感情的には理解できるが、理論的には説明できない。確かに生活保護費は税金から出ているため、その使い道に異を唱えることは当然の権利であるが、生活保護を受ける人の自由を全て奪うのは正しいことなのか。フリーライダーのせいで本当に必要としている人が困るかもしれない。お金を自由に使うことを全面禁止にするのではなく、納税者と生活保護を受ける人が納得していく金額は自由に使って良いとした方が、生活保護を受けつつも真面目に生きている人にとって良い影響を与えるのではないか。」

「同じ環境で生きているのだから、老若男女関係なしに法律の下で規制していかないと、社会の規律が乱れてしまうため、些細な事でもマナーは守るべきだ…。」

## 過去の投稿から

「生活保護の不正受給件数によって、申請をもっと厳しくするのは、よくないと思う。今でも屈辱さを感じると言われる審査の手続きをもっと厳しくすると、本当に生活保護を必要とする人達が受け入れなくなるかもしれない。そして、生活保護を受けているからと言って、基本的な生活をするうえに必要なだと思われがち、薦屋はダメとか、スマホはダメなどの制限はすべきではないと思う。一方、パチンコなどのようなギャンブルに手を出すことは絶対ダメだと思う…。」

「生活保護を受けることができる人の規定をもっと多くの人に広めるべきだ。そしてもっと生活保護への理解を深めた方が良いと思った。また、老人の援助をもっと協力的にすることで生きやすい社会になっていくのではないか。」

「生活保護によって起きる問題というのは仕方がないと思う部分もあります。というよりは、なるべくしてなったんだろうなと。病院側としては確実に支払いをしてくれるわけですし、お金優先に考えてしまうと良い客であることはたしかです。受ける側がそのお金をパチンコや競馬などに使用してしまうのは無料でお金が入る環境に甘えてしまうのでしょし。ただ一度このような制度が作られてしまうと無くすことはできませんし、本当に生きるために必要にしている人もいるのはたしかです。監視を強めてもその目を潜り抜ける人もいでしょうし、基準を高くしてしまうと必要な人に行きわたらない。必要な費用もろもろを考えると、この先これ以上の補助や無償化は無理ではないかと。基準からギリギリ外れて補助を一切貰えず、真面目に働いて税金納めている人が一番損している時代になっているのではないでしょか…。」

「不正受給者が全体に占める率が1.8%である件について、それを認めている社会は良くないと思った。たしかに全体の中で見たら少ない数字だけど、国全体が不正受給者を根絶する姿勢でいなければいつまでもこの数字は変わらない。不正受給者がいて当たり前という考えは無くすべきだと思う。」

### 3. 家族意識の離散

#### 「引きこもり文学」

赤坂、田口らの近年の小説：「孤立のモチーフ」

- 家族のようにもともと親密だとされてきた絆からもひとり孤立し切り離されてあること
- 切り離されているがゆえに自己自身の存在すら確証しえないこと
- 生れ落ちた瞬間から誰もその力に支えられていたはずの共同的关系が「最初から」じつは存在してはいないのではないかという疑念

家族のなかに生まれ、家族のなかで生きていることが日常感覚として自明で自然だと感じられにくい現実？

#### 意識調査データ

- 家族の一員だと「あまり感じない」「まったく感じない」薄い帰属意識層  
小学生の 5 人に 1 人  
中学生の 3 分の 1 近く（くもん子ども研究所 2000 年調査）
- 「結婚しなくてはいけない」と考えている若年層はフランスを下回る 2 割（日本青少年研究所 2000 年調査）
- 「子どもをもたなくてもよい」と考える女性、90 年代後半に多数派に

性と結婚との分離意識

- 婚前交渉肯定派、90 年代半ばには多数派となる
- 若年層の性体験率の上昇
- 自分が「良い相手と結婚するだろう」と想像できる高校生、90 年代末には半数程度に低下

cf. そのいっぽうで、「友だち親子」現象

### 4. 「個体化」現象

① 社会生活全般を個人単位に分解してゆく「個体化」（individualization）の力

② 消費社会化

- 家族生活のあらゆる領域を消費の場として再編
- 家族のさまざまな共同紐帯を弛緩させ、個体化圧力を家族関係の内部へ

↓

家族成員それぞれの行動上・意識上の「自立」（離散）を促進

ex. 食事時間の個別化

ファーストフード・チェーン、コンビニ、個室（子ども部屋）、携帯端末、ゲーム機…

## 5. 「家族」の人為性

家族が「いっしょにいること」（空間共有）「いっしょにすること」（時間共有）の再編

- 「意識し努力してそうする」という人為的な営みへ
- 家族としていっしょに行動すること、ひいては家族生活自体が、意識的に構築すべき特別な努力を要するものと感じられるようになった

ex. 家族旅行、「月一ファミレス」

### 子育ての人為性

子ども＝ × 「天からの授かりもの」

○ 親になる決意と選択のもとで創造される「作品」

- 子育ては、計画性と慎重な配慮とが要求される「事業」
- （過剰な？）責任の意識（子育て事業の責任は、当然親がになうべきもの）
- 生まれたこどもに対する期待水準の高さ  
大学まで行かせるのが最低限の親の義務  
子どもをもつ以上、いい加減な育て方ではない、という感覚

「…親のエゴに映るこうした姿勢は、むしろ、子どもが自ら将来を決めるさいの選択の幅をひろげておいてやりたいという「責任」意識に支えられている。だから、子どもを自然な成長に任せ「放置」して、「できること」をしておかない「弱さ」の方こそが、逆に、鋭い自責の対象になってしまうのである。」（中西 2004: 252-253）

cf. 「ヘリコプター・ペアレント」現象、オーディション・ブーム、お受験…

親として「自分ができることをきっちりしておかないとだめ」という意識転換

↓

- 自分の努力の及ばぬ範囲への鋭敏な不安  
リスクへの過剰防衛反応  
危険な遊び場所、遊具施設、危険な交友関係  
「いじめや犯罪が多発するいまの社会で子どもが生きるのは大変だし、かわいそう」

↓

「そんな時代に／そんな環境では子どもはつukれない」という抑制  
家族や子育ては、それだけの「能力」ある人びとだけに許される特権的世界？

## 6. マネージャーとしての主婦

主婦役割の移行：「生活マネジメント」領域へ

異なる生活時間や生活プログラムを調整しコントロールする役割

↑

主婦役割の負担・圧力を負わされる女性たち（企業社会と消費社会との接続場面としての家庭）  
所得上位層にかぎられる専業主婦

↓

子ども世代にとってのすがた

- 「えらいとは思いますが、あんなに大変な母親の役割は自分にはできそうにない」
- 家族を簡単につくることなどできないという感覚の広がり

パラサイト・シングルやフリーターの増加

経済的現実（親・家族がいなければ「食べていけない」）との矛盾

## 7. 検討・考察

「好きでパラサイトしているわけではない」

「親と同居して、親の経済に依存したい、親といつまでも一緒にいたいという若者が大きく増えたから、パラサイト・シングルが増えたというわけではないだろう。もちろん、そういう若者も多少はいるだろう。しかし、早く結婚したい、一人暮らししたいのに、条件が整わないので、親と同居する。つまり、結果的に楽で自由な生活を送っているという若者が大多数ではないだろうか。」（山田 1999: 14）

- 「結婚しなくてはいけない」
- 自分が「良い相手と結婚するだろう」と想像できない
- 「子どもをもたなくてもよい」
- 子どもをもつ以上、いい加減な育て方ではできない
- 「えらいとは思いますが、あんなに大変な母親の役割は自分にはできそうにない」

### 過去の BBS 投稿から

「『結婚したいか』という話ですが、恋人と付き合っている期間が短いと、好き好きって勢いで結婚したいねーと思う。でも、長く付き合ってた、長く同棲したりしていると、家事もやったりしているわけだし、結婚したところで、奥さんという肩書以外に、何があるんだろう？っていう感じで、結婚する必要性が分からなくなるといった。その場合、結婚というよりは、子供がほしいから結婚と、考える順序が逆になるのかなと思いました。」

## 8. 参考文献

中西新太郎、2004、『若者たちに何が起きているのか』花伝社、第 14 話  
赤坂真理、2005、『ミューズ』講談社文庫  
赤坂真理、2003、『ヴァイブレイタ』講談社文庫  
田口ランディ、2007、『コンセント』新潮文庫  
宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘、1997、『未婚化時代の親子関係』有斐閣  
山田昌弘、1999、『パラサイト・シングルの時代』ちくま新書  
山田昌弘、2001、『家族というリスク』勁草書房  
伊田広行、1998、『シングル単位の恋愛・家族論』世界思想社  
林道義、1996、『父性の復権』中公新書  
山田昌弘編、2001、『家族本 40』平凡社 ←家族研究に関するブック・ガイド

## 9. 次回の予告

1 月 21 日 最終回 総括討論

以 上

【授業 HP】 <http://t-enomoto.la.coocan.jp/komajo/>

【BBS】 <http://9021.teacup.com/tenomoto4/bbs>